

Project LA 概要のご紹介

2012年4月20日

**AITC協働プロジェクト会議
(部会リーダー、運営委員有志)**

ご紹介内容

1. Project LAについて
2. System LAの目的
3. システムの概要
4. スケジュール構想
5. 想定成果物
6. 参加のお誘い

1 .Project LAについて

■協働プロジェクトの目的

- 1) 一つのテーマのもとに、部会が集結・連携し、プロトタイプを構築することで、先端ITの有用性を検証、評価する。
- 2) 会員に先端ITに関するスキルやノウハウ習得の場を提供する。
- 3) 構築後のプロトタイプを一般公開し、試用してもらうことで、先端ITの有用性を世に広く訴求し、利活用推進の一助とする。

■協働プロジェクトのテーマ&名称

テーマ：「知識から行動へ (Leads to Action) 」

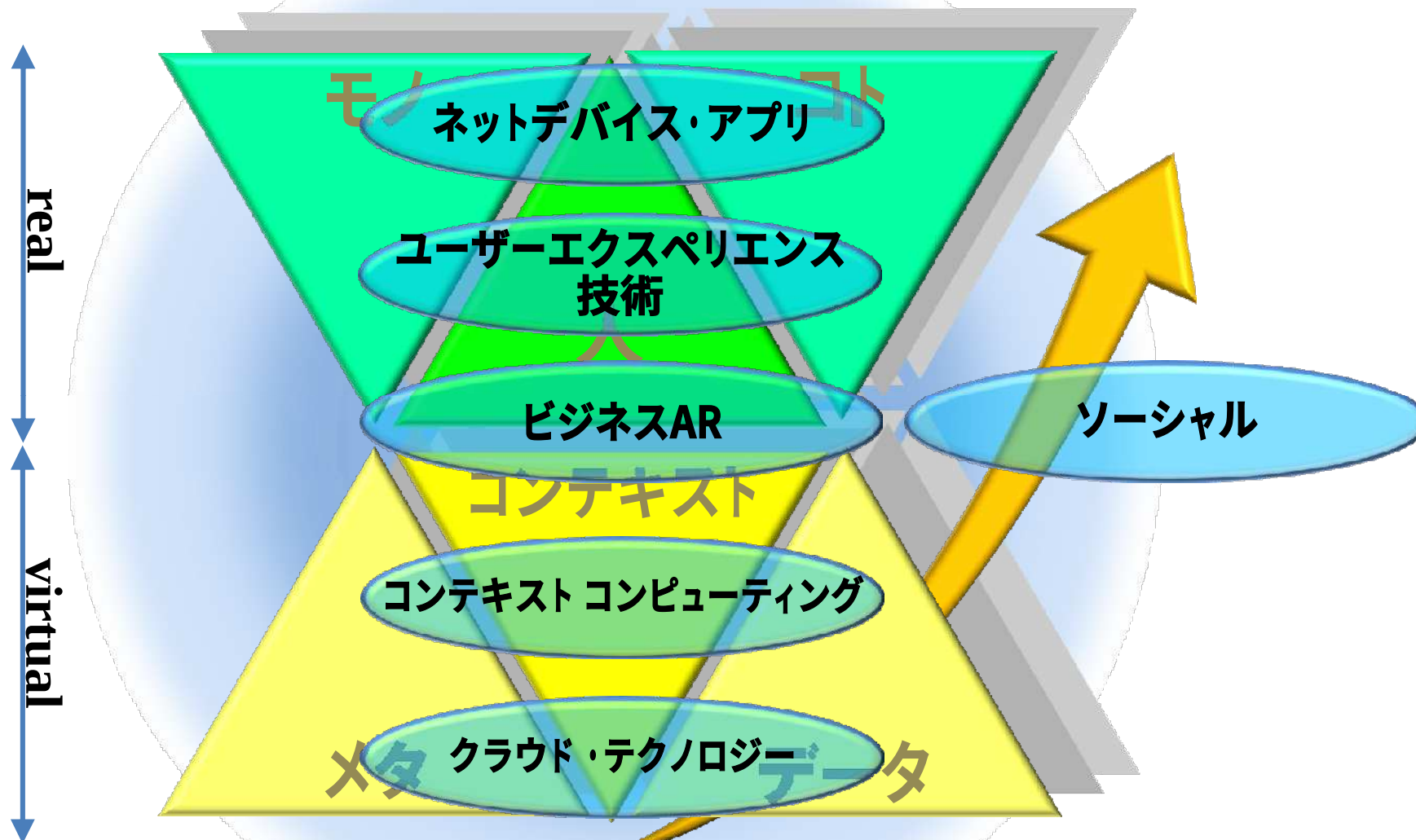
「単に頭に入っている情報や知識に価値がある」状態から、「情報や知識を活用して行動し、日常生活に活かすことに真の価値がある」との考えに基づき、収集した情報を知識化し、行動を促す・行動を引き起こす仕組み作り

名称：プロジェクト名称 Project LA、 システム名称 System LA

■期間：2011年度(2011年9月)～2012年度(2013年8月) 2年間

一般公開：2013年3月、最終報告：2013年9月

■部会の位置付け



2. System LAの目的 ①

収集した情報を知識化し、行動を促すシステム

インターネットのビッグデータに人々が意味付けし、機械的に整理・分析することで、個人化した知識を提示し、一人一人の行動を促す



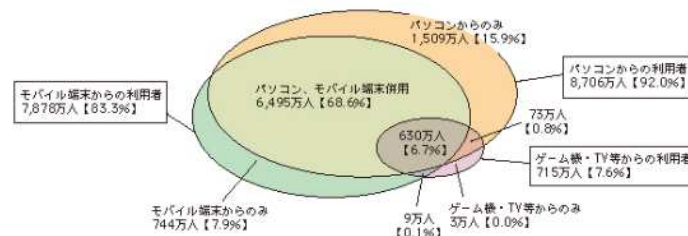
2. System LA目的 ②

なぜ必要

国民の多くが世界屈指のネット接続環境を享受している反面、「情報や知識を使いこなして行動し、日常生活に活かす」といった情報リテラシーについては底上げが必要だと考えられる

「いつでも、どこでも、何でも、誰でもが、ネットワークに簡単につながる」環境は、ほぼ実現

- 国民の約8割にあたる9,462万人がネットを利用
- かつ、7,878万人がモバイル端末からの利用



※ モバイル端末：携帯電話、PHS、携帯情報端末（PDA）及びタブレット型端末を指す。

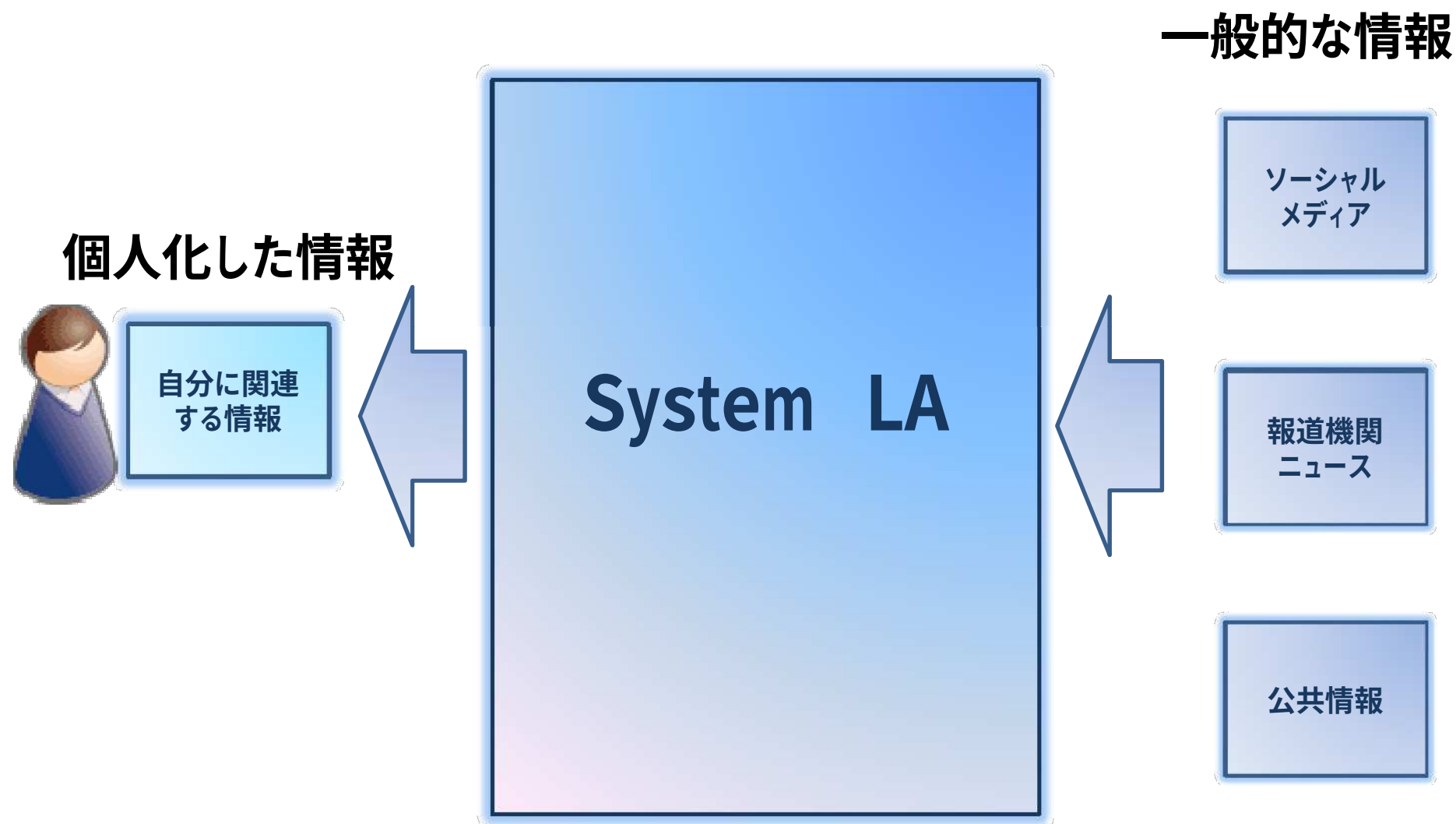
※ 出典：いずれも平成23年版情報通信白書（2010年時点のデータ）

大規模災害時に帰宅困難者が多数発生したことで、国民の多くが情報リテラシーを十分に備えていないことが、図らずも露呈

- 東日本大震災では首都圏の約515万人が帰宅困難者に
※ 出典：内閣府調査（2011/11/22発表）
- 同年の台風15号でも、多くの帰宅困難者が発生
- そもそも、国民の情報リテラシーがどの程度あるのか、年々向上しているかといった実態が十分に把握されていない

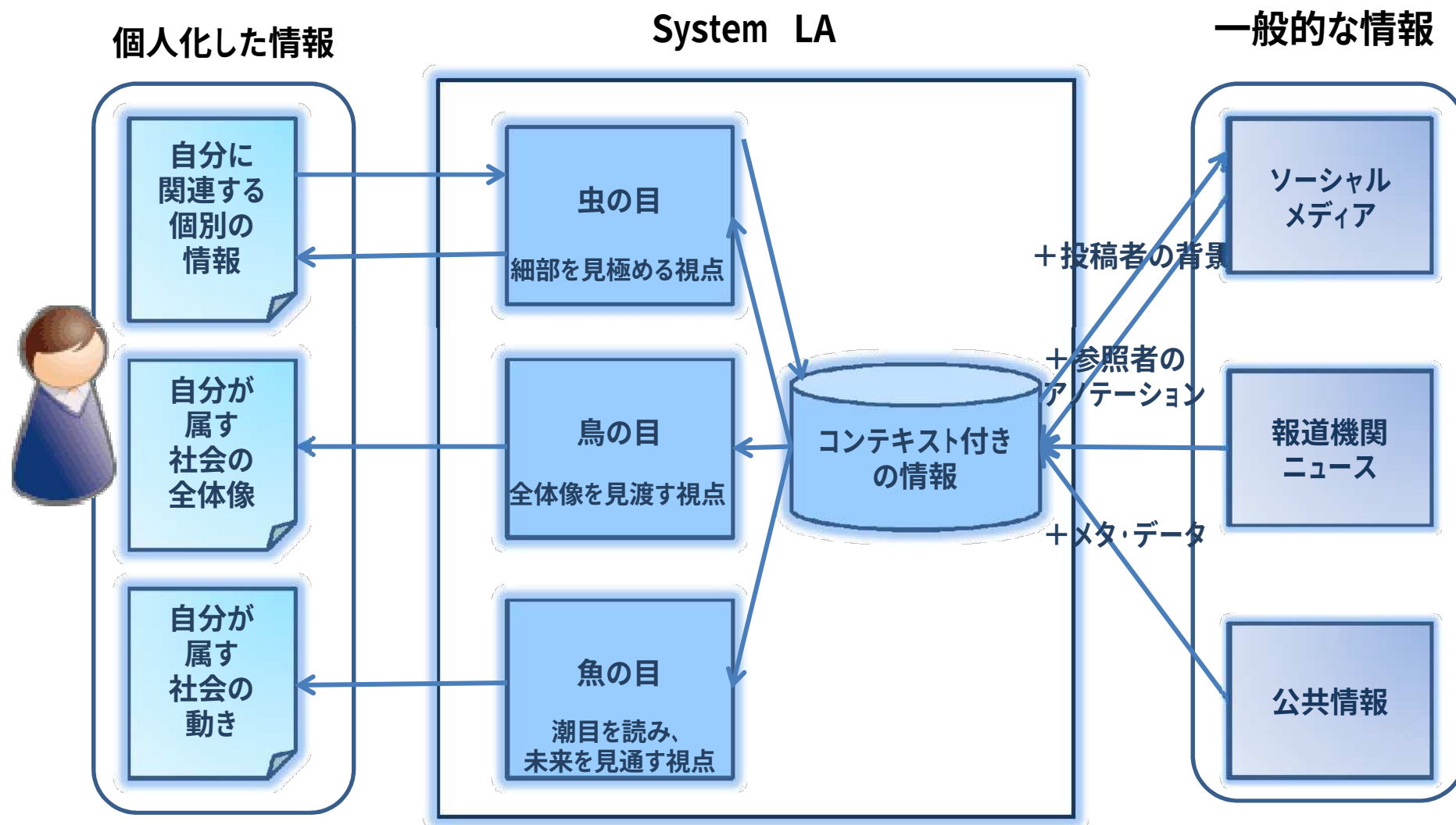
3. システムの概要

システムは状況の異なる一人一人が適切な行動を取るために、一般的なビッグデータを自分への影響が分かる個人化された情報に変換して提供する。



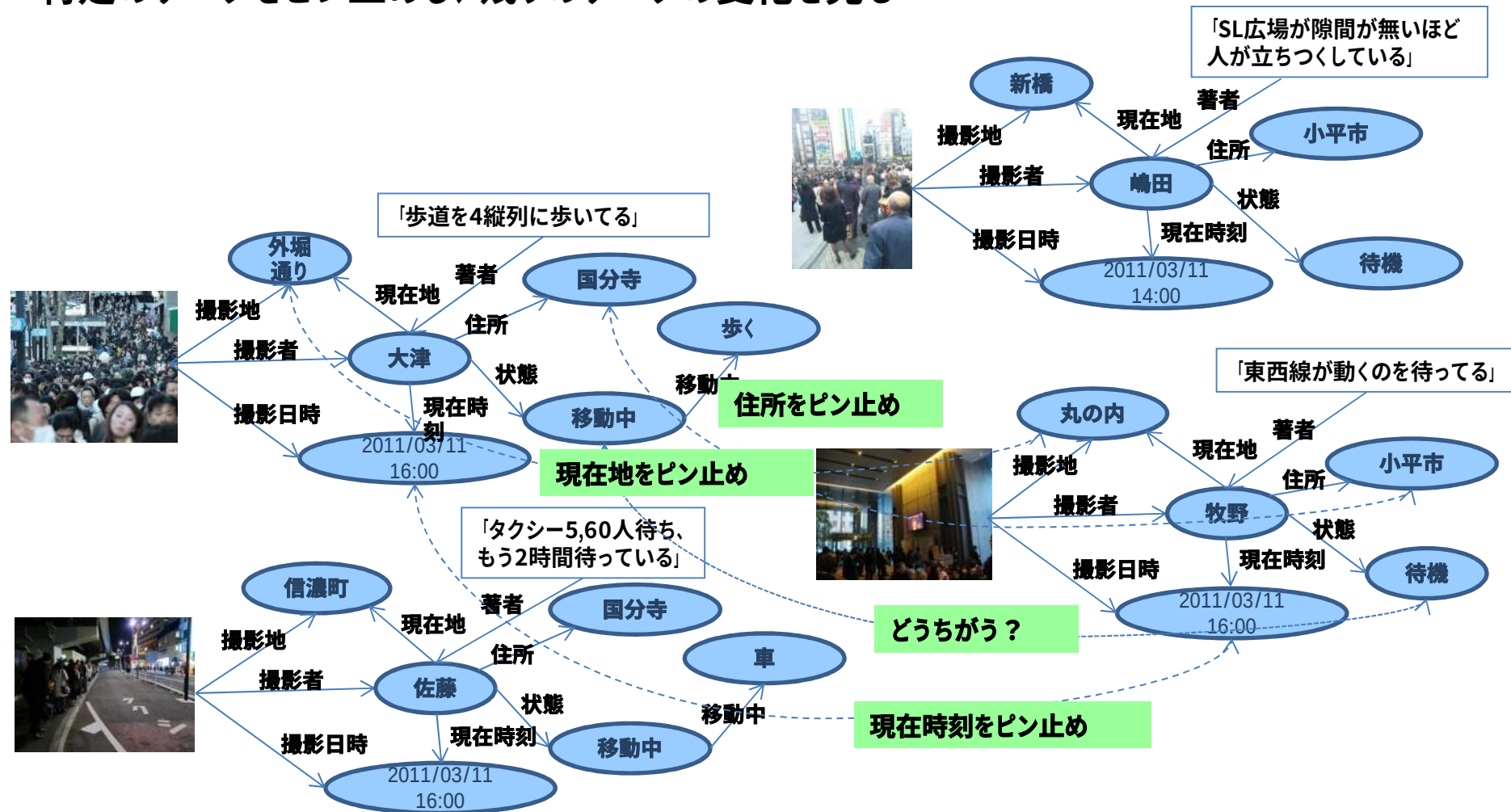
3. システムの概要

システムは状況の異なる一人一人が適切な行動を取るために、一般的なビッグデータを自分への影響が分かる個人化された情報に変換して提供する。



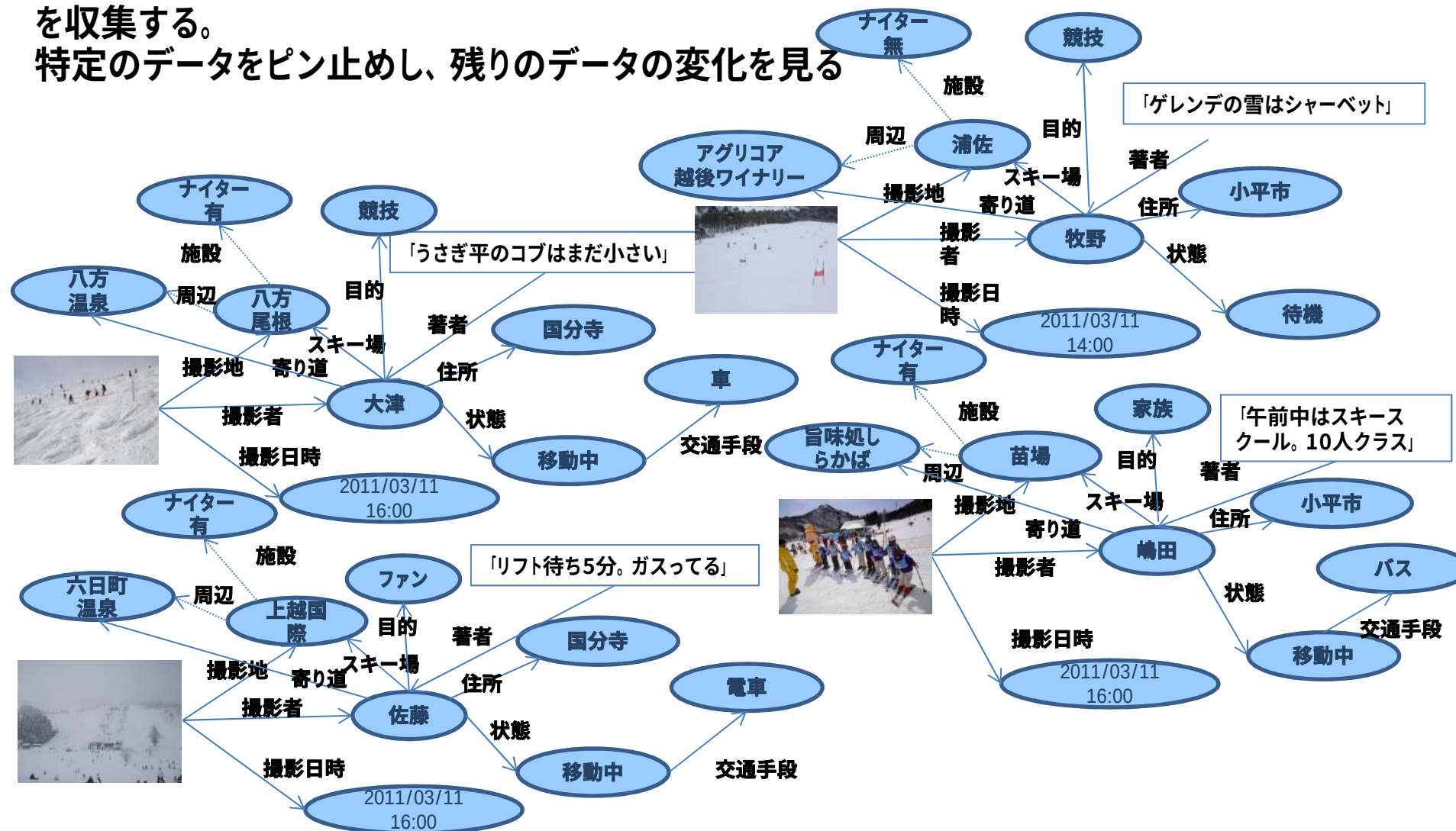
3. 1 コンテキスト付きの情報 例1

関連するデータを関係づけ (コンテキスト) たコンテンツを収集する。
特定のデータをピン止めし、残りのデータの変化を見る



3. 2コンテキスト付きの情報 例2

関連するデータを関係づけ (コンテキスト) たコンテンツを収集する。
特定のデータをピン止めし、残りのデータの変化を見る



3.3 システムの概要 (補足説明)

システムは状況の異なる一人一人が適切な行動を取るために、一般的で膨大なビッグデータを自分への影響が分かる個人化した情報に変換して提供する。

【一般的な情報】

- システムが全ての情報を機械的に処理するのではなく、利用者一人一人が観察、目利き、意味付けを行い、人の力を最大限に活かすことで、社会と環境に関する情報量を格段に増やし、また、システムと人の可読性を高めます。
- 情報源は、システムの利用者の発信を含むTwitterなど既存のソーシャル・メディア、報道機関がネット上で発信するニュース、公共機関が提供するデータなどを対象にします。

【個人化した情報】

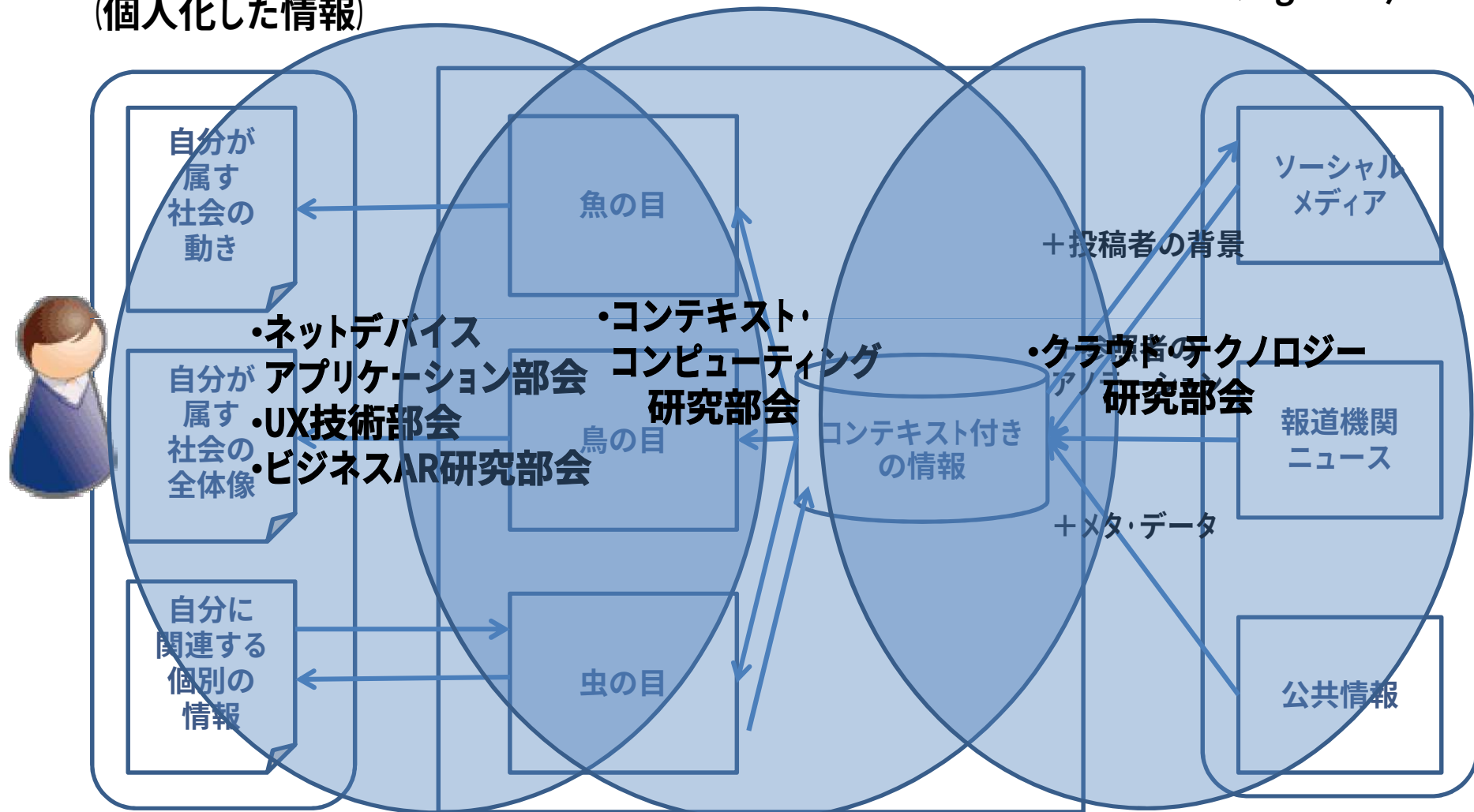
- システムは、訓話で語られる虫の目、鳥の目、魚の目になぞらえ三つの視点で情報を提供します。
- 虫の目 (細部まできちんと見極める能力)
 - システムが収集した個々の情報の中からその人に関連の高い情報を選択し提供します。
- 鳥の目 (全体像をしっかりと見渡す能力)
 - 利用者と同じ属性または同じ状況にいる人々のソーシャルメディアで発信する情報を集約し、人々の意識と行動、人々が見聞した街や自然など環境の様子を統計情報として提供します。
- 魚の目 (潮目を読み、未来を見通す能力)
 - 鳥の目で作成した統計情報の時間変化を将来を予測するための情報として提供します。

3. 4 各部会に関わる領域

自分への影響が
分かる情報
(個人化された情報)

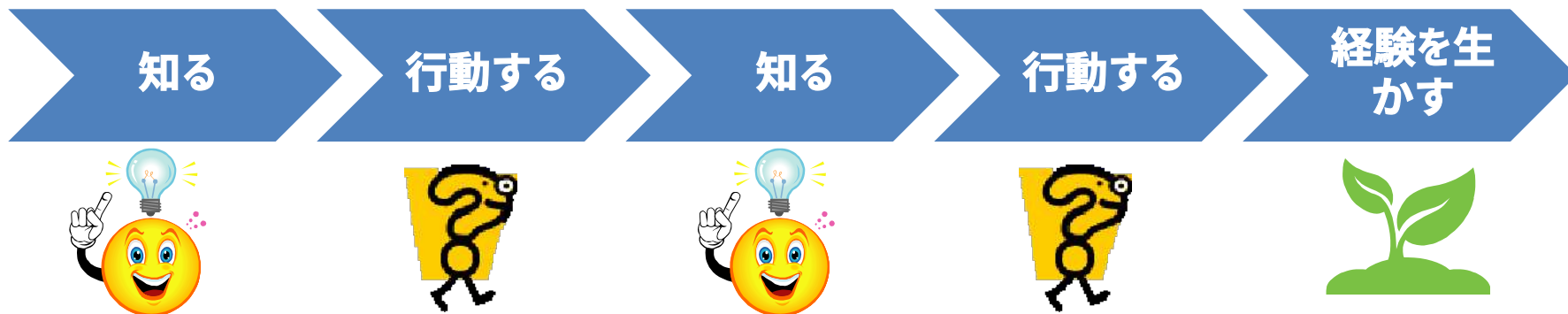
System LA

一般的な情報
(Big Data)



3.5 System LAで期待する効果

- 日々の暮らしの中で実際に行動する人がこのシステムを活用することで
 - (1) 同じ行動をする**他者の経験**が自分の見聞となり、
 - (2) 個々の情報では見えない**全体**として現れる新たな**性質**が得られ、行動の選択肢を増やし、また、行動の動機付けが強くなる
- このシステムは、行動を起こす前の計画に使うだけでなく、行動している時に
 - (1) 現場で直面し初めて分かる**予測しない課題**の解決
 - (2) 発生する**新たな要求**への対応
 - (3) 近視眼になる自分の置かれた**周囲の状況**の把握に対して効力を発揮すると期待している



3.6 システムの利用シーン

- System LAは、個人が自分の行動を考える情報を提供するツールとして、災害時にも平常時にも、利用されることを想定しています。
- 災害時の利用例
 - 2011年の3/11の東日本大震災や9/21の台風15号など首都圏で発生した帰宅困難な通勤・通学者の支援
- 平常時の利用例
 - 冬季スキーに出かける旅行者のスキー場選びや現地の情報共有の支援

3. 7 帰宅困難者の支援

- Why
3・11東日本大震災時、首都圏で外出中の人、帰宅途中の人は、**事の重大性**が分からず、また、**自分に意味を成す**キメ細かな情報は報道機関のニュースでは得られない
- How
例えば、**自分と同じ**勤務者が業務を中断し始め (**意識**)、自宅が近くの人**の**帰宅手段 (**行動**)、その人たちが見た街の様子 (**環境**) を**共有**できれば、危機意識が高まり、適切な行動を取ることができるのではないか。
- What
システムが利用者と**同じ**状況または**同じ**関心事を持つ**類似する人々**を見つけ、その人々の行動や発信する情報を整理・統合・分析して**リアルタイム**に利用者に提供する。

3. 8 虫の目・鳥の目・魚の目の検討例

「歩道を4縦列に歩いてる」



「SL広場が隙間が無いほど人が立ちつくしている」



住所=東京都多摩東部 現在地=新橋

歩き
(3,000人)



Ave. 2 km/h →
Max. 4 km/h →

休憩中 →
(800人)



車・バス →
(100人)



Ave. 0.5km/h →
Max. 15km/h →

電車 →
(50人以下)



Ave. 0.km/h →
Max. 0km/h →

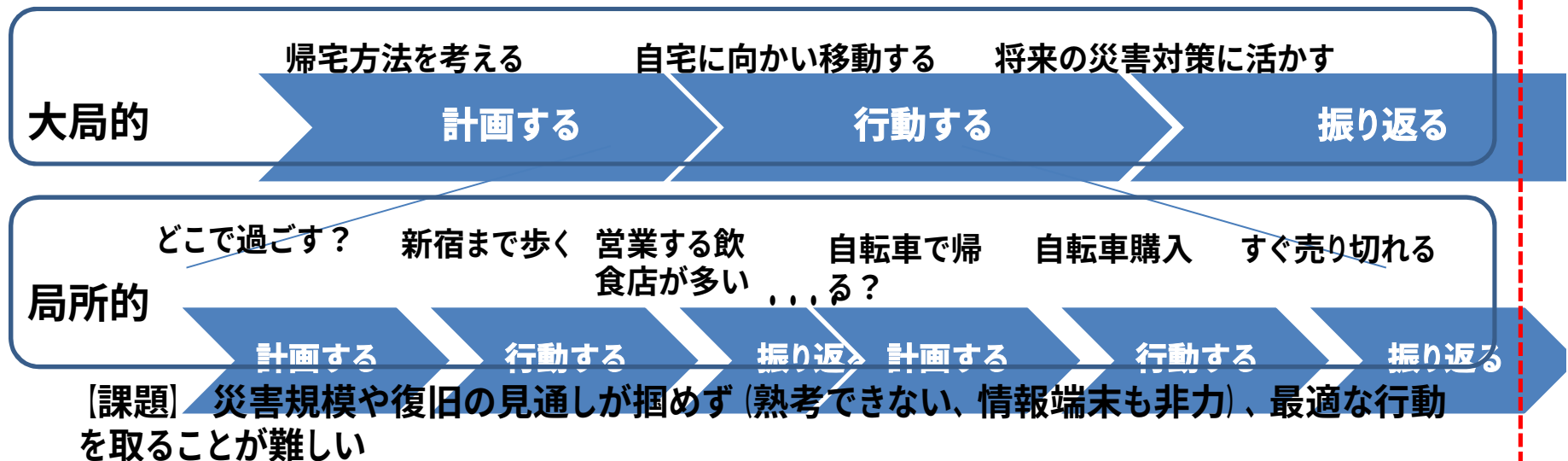


3.9 災害時の活用検討

- シナリオ前提条件
 - 首都圏で通勤・通学する人々が自宅から離れた勤務地、外出先で大規模な地震で被災し、災害による命の危険性が低いことを確認した後に自宅に帰宅する。
- シナリオ
 - 地震発生後、JR・私鉄など鉄道の運行が全面停止。家族と職場の同僚の安否が確認できた後、業務を中断し帰宅を決断。災害規模や復旧の見通しが分からない状況で、手探り状態で帰り方を検討し行動する。

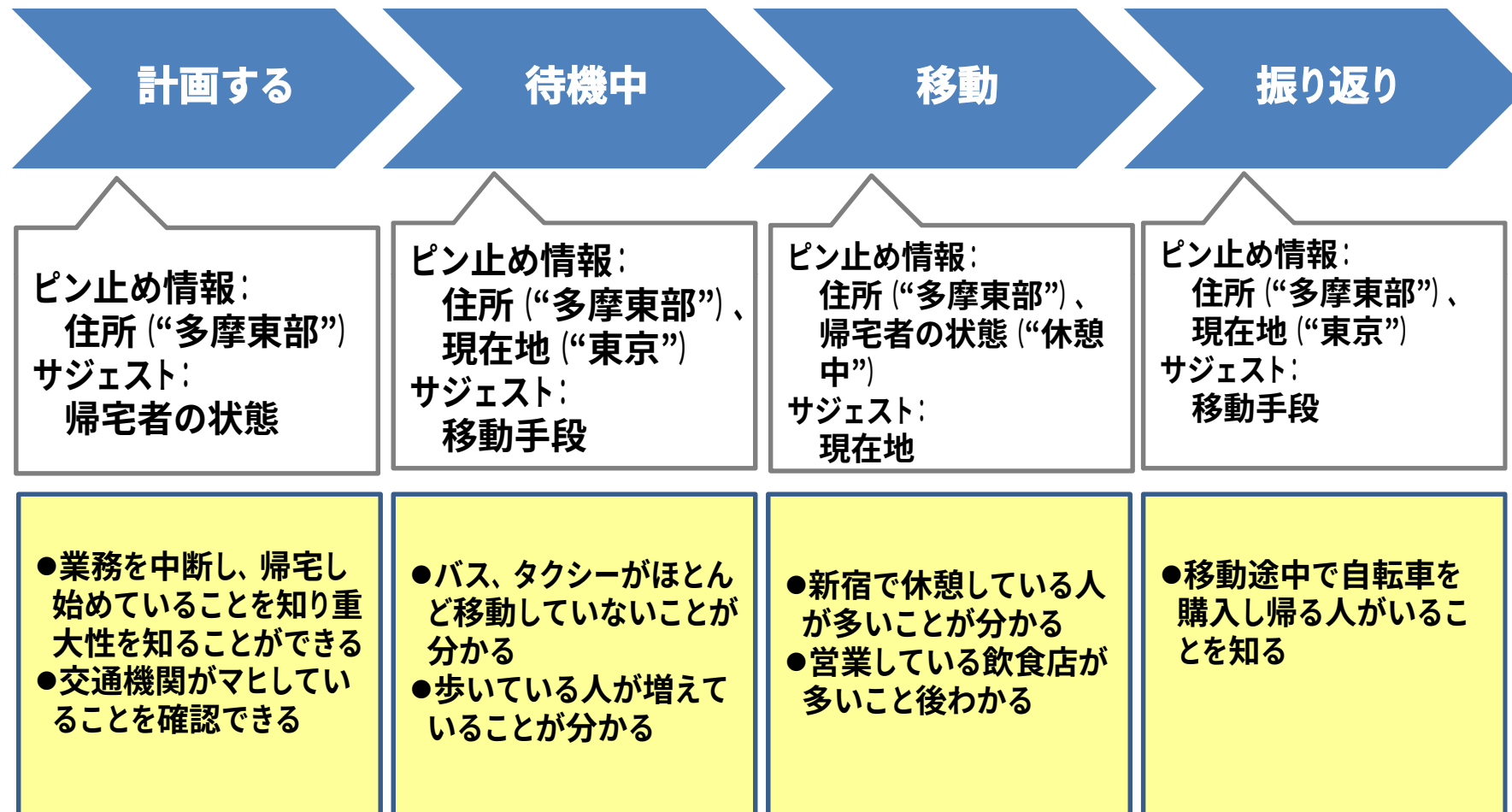
災害時の帰宅の課題

【課題】 災害時の帰宅方法・帰宅困難時の過ごし方が想像できない（個人化できない）



3.10 災害時の活用検討

- シナリオでの効果
 - 「計画をする」「移動中」「現地」「振り返り」で実現できる具体的な事象を下記に記載します。

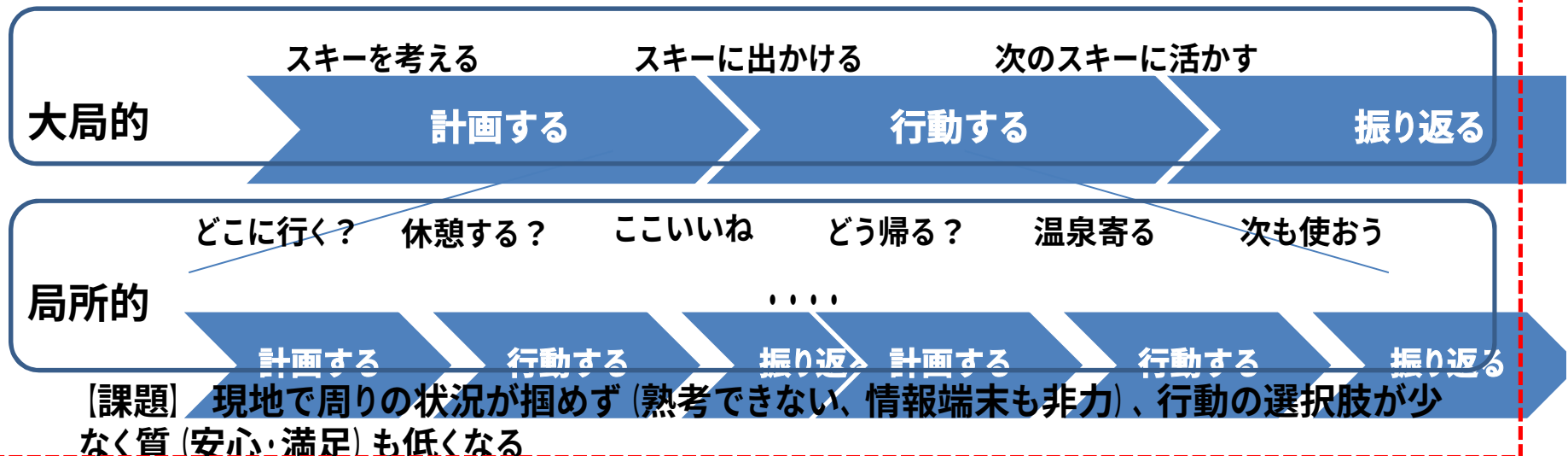


3.11 平常時の活用検討

- シナリオ前提条件
 - 行動を促す観点を平常時にも取り入れるために、“出かける”ということを前提条件としました。
- シナリオ
 - 今回は、出かける要素としては、「スキーに出かける」というシーンでのシナリオを作成しました。
 - スキーに出かけるといっても、計画段階で、どこに行くのか？といった検討や、スキーに向かう際のどう向かうのか？寄り道をするのか？といった決めるべき内容は、あらゆる場面で登場します。計画、移動中、現地、帰ってからというシーンを分けて、ピン止めする情報とサジェストされる情報を説明します。

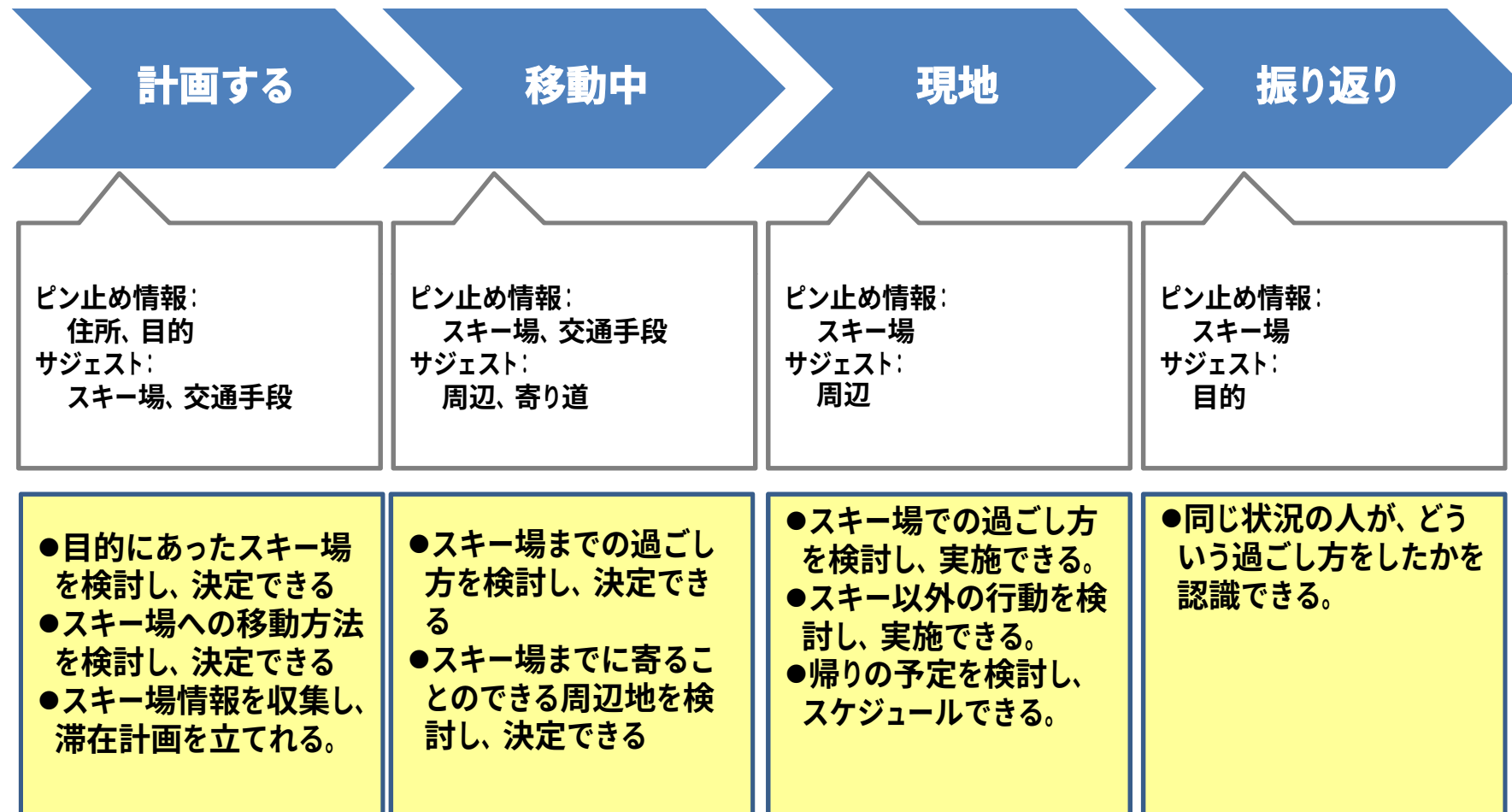
スキーに行くことに対する課題

【課題】 知識が無いと上手く情報（一般的な情報）が使えない（個人化できない）

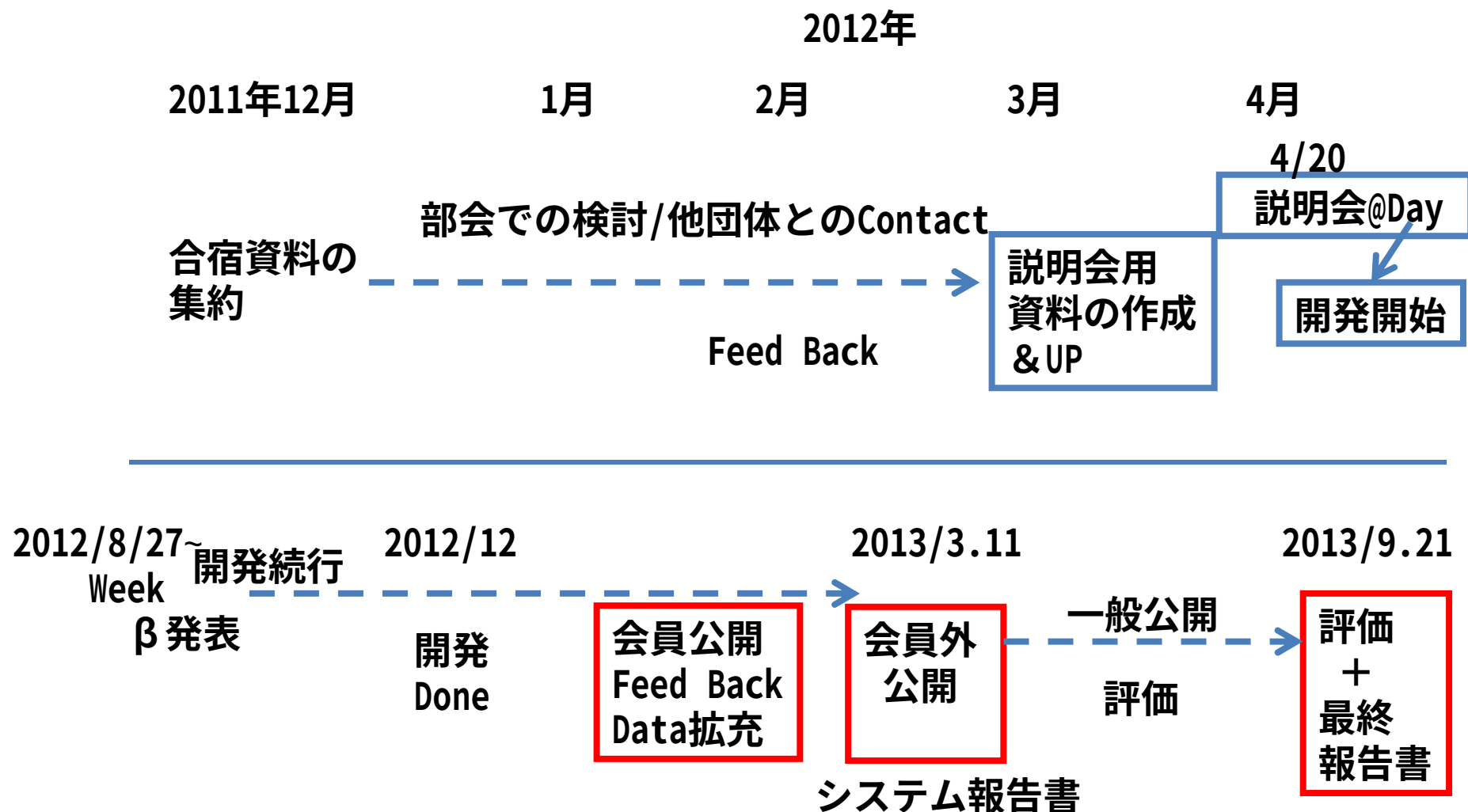


3.12 平常時の活用検討

- シナリオでの効果
 - 「計画をする」「移動中」「現地」「振り返り」で実現できる具体的な事象を
 - 下記に記載します。



4. Project LA スケジュール構想



5. Porject LA 想定成果物

■活動成果案

1) 一般公開

報告書

構築後のプロトタイプ

2) 会員限定公開資料

設計書

ソースコード

環境構築手順書

■ 成果物の取り扱い、知的財産権等について

会員規約および実施細則に記載された下記の関連条項や項目に準拠する

－会員規約第50条（成果物の取り扱い）

－会員規約第51条（知的財産権）

－実施細則「共同プログラム開発に関して」

II. 公開・利用に関する原則

V. 成果物としての共同開発プログラムの取り扱いについて

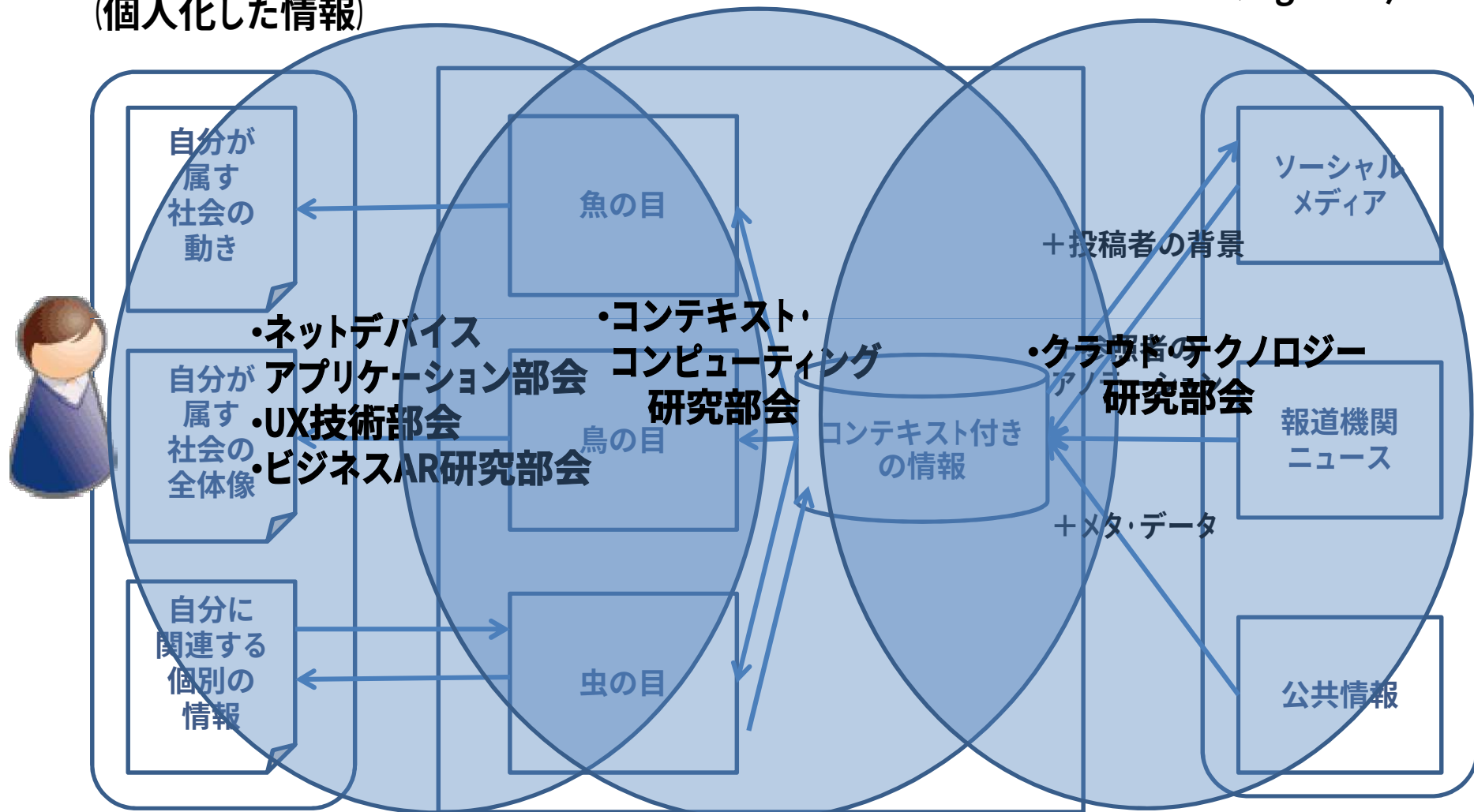
VIII. 権利侵害への対応について

【再掲】各部会に関わる領域

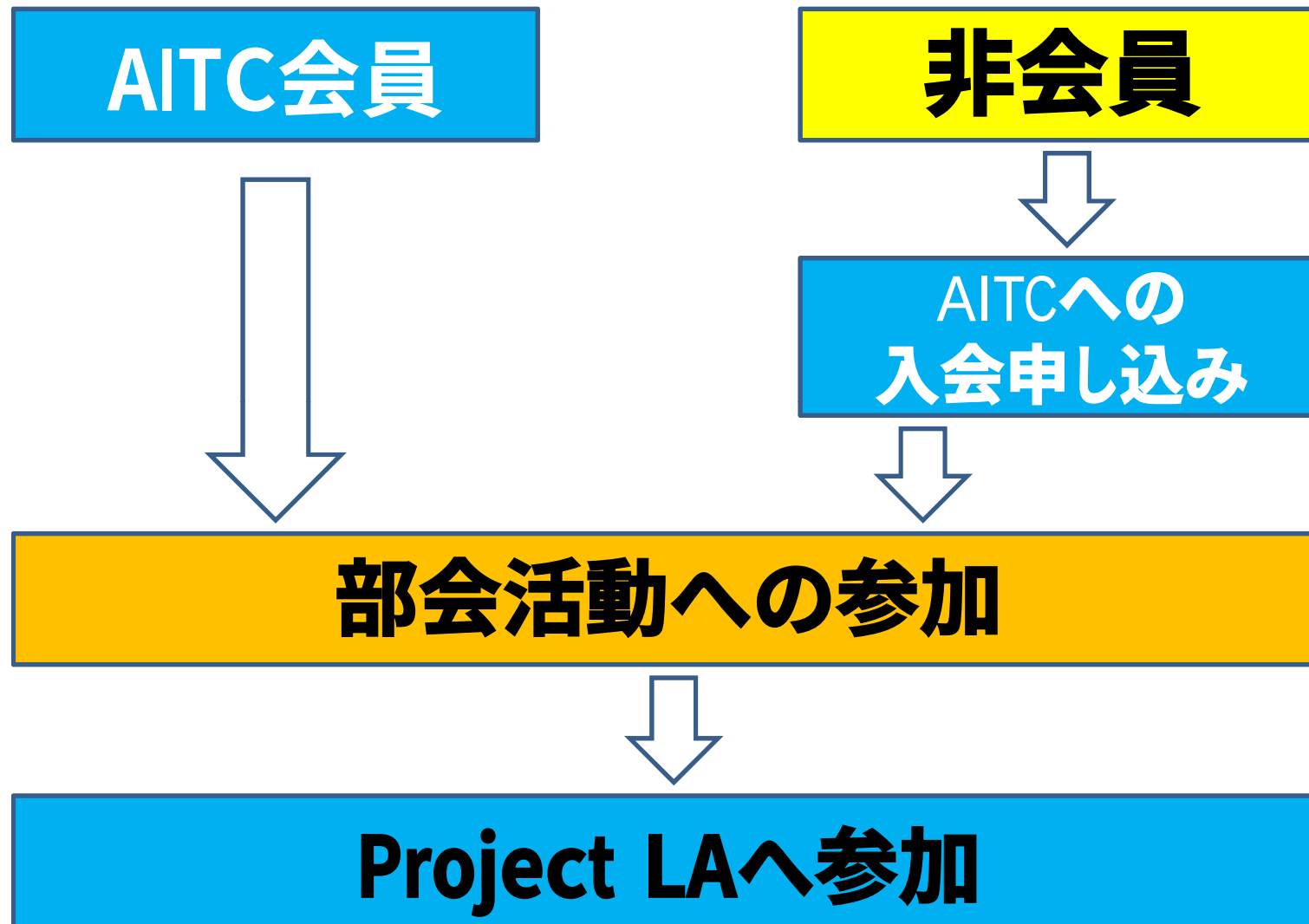
自分への影響が
分かる情報
(個人化された情報)

System LA

一般的な情報
(Big Data)



6. Project LA参加のお誘い



**本日のご説明をもって、Project LAはスタートします。
各部会における詳細検討は、これからが本番です。
部会の考えと全体を調和させつつ進めていきます。**

AITCの総力をあげて実証システムの構築に取り組みましょう

皆様のご参加をお待ちしています。

協働プロジェクト会議メンバー一同